

### O3-003

## 早産児の乳幼児期の発達と母親の育児ストレス

松崎 敦子<sup>1</sup>、出口 貴美子<sup>2</sup>、岡橋 彩<sup>3</sup>、  
山瀬 聡一<sup>3</sup>、長野 伸彦<sup>3</sup>、石井 和嘉子<sup>3</sup>  
桃木 恵美子<sup>3</sup>、井上 健<sup>4</sup>、西田 佳史<sup>5</sup>、  
森岡 一朗<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 三育学院大学看護学部

<sup>2</sup> キッズ&ファミリークリニック出口小児科医院  
子どもの脳とこころの診療部

<sup>3</sup> 日本大学医学部附属板橋病院小児科

<sup>4</sup> 国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第二部

<sup>5</sup> 東京工業大学工学院

#### 【問題と目的】

周産期医療の発展により我が国の新生児死亡率は減少しているが、在胎 37 週未満の早産児の割合は減っていない。早産児の発達の特徴として、脳性麻痺や神経発達症の出現率が高いこと、また母親の心理的特性として抑うつ状態を呈しやすく育児ストレスも高いことが報告されており、子どもが NICU を退院した後も継続的な観察と支援が求められている。本研究では早産児の発達の特徴を明らかにし、母親の育児ストレスとの関連を検討する。

#### 【方法】

早産児で NICU 退院後のフォローアップ外来通院中の修正月齢 9-11 ヶ月の親子 27 組、および 24 ヶ月親子 15 組の計 42 組を対象に横断的調査を行った。研究参加に同意した母親に、PSI 育児ストレスインデックスショートフォーム（以下 PSI-SF；浅野ら）への記入を依頼し、小児科医または心理士が Vineland-II（黒田ら、2014）を実施した。PSI-SF は育児ストレスの要因が子どもに関するものなのか親自身に関するものであるのかを把握することができる質問紙である。分析項目は以下とした：【属性】在胎週数、出生体重、【発達】Vineland-II のコミュニケーション、日常生活スキル、社会性、運動スキルの標準得点、【育児ストレス】PSI-SF の子どもの側面と親の側面のパーセンタイル値。

#### 【結果】

全ての分析項目で調査時月齢の差異による影響は見られなかった。超早産（在胎 28 週未満、8 例）、早産（28 週以降 32 週未満、20 例）、後期早産（32 週以降 37 週未満、14 例）での群間比較では、早産児は後期早産児に比べ、「社会性」が有意に低かった（順に  $80.35 \pm 14.26$ ,  $94.23 \pm 14.89$ ,  $p < .05$ ）。子どもの発達と母親の育児ストレスとの相関は、Vineland-II の「コミュニケーション」および「社会性」と、PSI-SF の「子どもの側面」との間に有意な負の相関があることが示された（順に  $r = -.34$ ,  $r = -.36$ ,  $p < .05$ ）。

#### 【考察】

早産児と後期早産児では社会性の発達に差がある可能性があることが示唆された。また早産児の母親の育児ストレスには、子どものコミュニケーション発達および社会性発達に関する特性が関連している可能性が示された。今後も症例数を増やし更なる検討をしていく。

### O3-004

## 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行が 1 歳 6 か月児の発達に及ぼす影響

京野 由紀<sup>1</sup>、西山 将広<sup>1,2</sup>、老川 静香<sup>1</sup>、  
徳元 翔一<sup>1</sup>、山口 宏<sup>1</sup>、富岡 和美<sup>1</sup>、  
三品 浩基<sup>3</sup>、野津 寛大<sup>1</sup>、永瀬 裕朗<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野

<sup>2</sup> 兵庫県立こども病院神経内科

<sup>3</sup> 神戸市こども家庭局こども家庭支援課

#### 【目的】

2019 年 12 月より全世界的に感染拡大した COVID-19 の影響を受け、本邦においても乳幼児健診の中止、自粛やクラスター発生による登園機会の減少、マスク着用や social distance の重視によって、乳幼児を取り巻く状況は大きく変化した。しかし、その変化が乳幼児にどのような影響をもたらしたかは明らかになっていない。そこで今回我々は、COVID-19 の流行が児の発達に及ぼす影響を調べることを目的とした。

#### 【方法】

神戸市倫理委員会の承認の下、後方視的研究を行った。神戸市の 1 歳 6 か月健診を受診した児のうち、2014 年 4 月から 2018 年 3 月までに出生した 46358 名（COVID-19 以前群）と、2020 年 4 月から 10 月に出生した 5699 名（COVID-19 以後群）を対象として 2 群を比較した。主要アウトカムは健診担当医が判定する「神経学的発達の異常」とし、副次アウトカムとして保護者が記入する問診票の発達に関する 16 項目とした。統計解析には  $\chi^2$  乗検定を用い、有意水準は  $p < 0.01$  とした。

#### 【結果】

1 歳 6 か月健診での神経学的発達の異常は、COVID-19 以前群 10.3% vs COVID-19 以後群 12.9% (odds ratio; OR [99% confidence interval; CI] 1.29 [1.16-1.44],  $p < 0.001$ ) であり、COVID-19 以後群で有意に増加していた。「指差しをしない」が COVID-19 以前群 7.6% vs COVID-19 以後群 13.9% (OR [CI] 1.96 [1.76-2.19],  $p < 0.001$ )、「バイバイをしない」が COVID-19 以前群 1.6% vs COVID-19 以後群 4.0% (OR [CI] 2.56 [2.10-3.13],  $p < 0.001$ ) と有意に増加していた。一方、「階段昇降」、「積み木を積む」、「有意語を話す」、「人と遊ぶ」、「目の届く範囲で遊ぶ」、「行動面で気がかりなこと」の 6 項目の異常は、COVID-19 以後群で有意に減少していた。

#### 【考察】

COVID-19 の流行前後で、1 歳 6 か月健診での神経学的発達異常の指摘、「指差しをしない」「バイバイをしない」が有意に増加しており、要因の一つとして他者との関わりの減少の影響が考えられた。